

「自己実現」から「交渉中の不確かな主体」へ ティーン向け小説のプロットの変化にみる ティーンエイジャーの位置づけ

田口 朋子

1.

小説家の Michelle Tea は、労働者階級に育った女たちの経験を語るエッセイ集 *Without A Net: The Female Experience of Growing Up Working Class* (2003) を編集し、その序文で、S.E. Hinton の小説 *The Outsiders* (1967, 以下『アウトサイダーズ』) から受けた影響について以下のように述べている。

五年生のとき、『アウトサイダーズ』という本に出会い、わたしの前で世界が広がりました。(中略) 登場人物はみな貧しく、(中略) 結末で、良い人物や中産階級にはなりません。結末では、主人公が貧しい子供としての経験を、他の子供たち、周りからの理解を求め、なんとか生きていこうとする他の貧しい子供たちの苦闘につなげて考えるようになります。そこで彼は自分の話を伝えようと決心します。彼は本を書き、それが『アウトサイダーズ』となるのです。(xi; 筆者訳)

1967 年に出版されたヒントンの『アウトサイダーズ』は、ティーンエイジャーをターゲット読者とするヤング・アダルト小説(以下、YA 小説)というジャンルの先駆けであり、現在でもその代表とされる小説である。この小説に影響を受けたと言うティは、その影響を生かして新たな複数の労働者階級の物語へつなげようと試みているのだが、ティのこの文章は、YA 小説がティーンエイジャーにもつ影響力だけでなく、YA 小説というジャンルの特徴もよく表わしている。YA 小説では、以前にはタブーとされてきた暴力やアルコール、貧困などの問題が取り上げられ、それらの問題に直面するティーンエイジャーの姿が、多くは一人称の物語として描かれている。しかも、そこに現れるティーンエイジャーは、居場所が定まらない不安定な立場にあり、その不安定な立場から、貧困や暴力、恋愛や友情などの経験を語り、読者の共感

を呼んでいるのだ。

この特徴は、YA 小説をそれ以前のティーン小説と大きく隔てている。YA 小説以前は、読者層としてのティーンエイジャーの位置は曖昧だったので、公共図書館では児童小説と一般小説の両方からティーン向け小説が選ばれていたのだが、そこに並ぶ小説は、白人中産階級の世界を舞台に、主人公が「良い人物」に成長する自己実現の物語が典型だったのだ。しかし 1960 年代になると、ティーンエイジャーを読者層に定めた YA 小説というジャンルが登場し、悩みを抱えたティーンエイジャーの揺れ動く姿が描かれるようになったのだ。ティーンエイジャーをめぐる言説にこのような変化が起きたのは、YA 小説というジャンルが成立する過程において、ティーンエイジャーという立場に社会的文化的な変化があったからではないだろうか。

YA 小説というジャンルの歴史に関しては、これまでいくつかの論文が発表されている。Kenneth L. Donelson と Alleen Pace Nilsen の *Literature for Today's Young Adult* は、YA 小説を紹介する基本的な文献であるが、そのなかで彼らは、YA 小説の文学的特徴を始め、ミステリーやファンタジーなどのカテゴリーごとに作品を紹介しながら YA 小説の歴史と特徴を解説している。また、YA 小説家であり研究者でもある Michael Cart はその著書で、YA 小説以前の代表的なティーン小説の紹介に始まり、60 年代後半から現在までの YA 小説のテーマや特徴の変遷を追っている。しかしながら、これらの研究では、個々の作品の紹介とその時系列的な把握にとどまり、YA 小説というジャンルそのものを、歴史的社会的条件との関係において考察していない。

もう一人の代表的な研究者である Roberta Seelinger Trites は、YA 小説を権力のダイナミクスが描かれるものとしてとらえ、独自の見解を示している。彼女は個々のプロットを詳細に解説し、YA 小説は家庭や学校などの制度と個人との交渉を中心においたポストモダン小説だと主張する。しかし、権力関係という重要な指摘をするトライツでさえ、YA 小説そのものを権力関係のうちに、すなわち社会的条件のうちにはとらえていない。YA 小説がポストモダンだとしたら、それはどのようにモダニズムと決別し、モダニズムから何を引き継いでいるのか。言い換えれば、いったいどのような経緯で YA 小説は、自己を中心にすえるモダニズムではなく、自己を権力関係のうちにとらえるポストモダン小説として登場したのか。トライツの分析は、社会的な背景を考慮にいれていないため、この重大な変化に関して無関心であり、したがっ

て権力関係に注目していながらも、その権力関係を物語の枠内に収まる機能として捉えるに留まっているのである。

ティーンエイジャーという年齢層自体が、歴史的社会的に意味づけられていることを考えれば、ティーンエイジャーを対象にした YA 小説は、その社会的背景のうちに捉えなければならないだろう。どのような社会的背景のもとに、「自己実現」を基調とした物語がすたれ、不安定な主人公を描く YA 小説が登場し、流通するようになったのか。本稿では、YA 小説の先駆けとなった『アウトサイダーズ』を歴史的なターニング・ポイントとし、主体位置という観点から YA 小説とそれ以前のティーン向け小説とを比較し、自己実現のプロットではなく、主人公を不安定な主体位置におくプロットへと変わっていったことを明確にしたい。そのうえで、ティーンエイジャーが消費者層として形成される市場にも注目し、ティーンエイジャーが顕在化する社会的背景と重ねて考察することにより、YA 小説を社会的文化的に位置づけていきたい。

2.

ヒントンの『アウトサイダーズ』は、「YA 小説」と銘打って出版され脚光を浴びた最初の小説である。この小説は現在でも YA 小説の代表とされ、ヒントンは YA 小説の作家に贈られる Margaret A. Edwards 賞が開設された 1988 年に、第一回目の受賞者に選ばれている。

物語は、語り手であり主人公である 14 歳のポニーボーイが、自分の属する少年グループとそれに対立するグループとの間の闘争を振り返るという形で綴られる。ポニーボーイは、両親を事故で失い、20 歳と 16 歳の兄と三人で暮らしている。兄二人はそれぞれ建築現場とガソリンスタンドで働き、ポニーボーイは休みがちながらも学校へ通っている。この兄弟はグリーサーと名乗る不良グループに属しているが、その仲間は、親からの暴力を逃れて公園で寝起きしているジョニーや、万引きが得意なチャラ、刑務所に何度も出入りしているダラスといった少年たちで、学校へ顔を出すのはポニーボーイだけである。彼らはムスタングに乗っている裕福な少年たちのグループと対立関係にあり、町ですれ違うたびに小競り合いを繰り返している。グループ同士の闘争がエスカレートしていくなかで、刺殺事件が起き、最終的には二人の仲間、ジョニーとダラスも命を落としてしまう。

日本語訳のあとがきには、登場人物たちが「息遣いが聞こえるほどリアル」(286)に描かれていると評されているが、一方でマイケル・カートは、この小説は評判ほどにはリアルな小説ではなく、むしろセンチメンタルなファンタジーのようだという(48-52)。不良少年にしては言葉づかいに乱暴さが足りないし、少年たちをセンチメンタルに美化して描きすぎている、というわけである。この二つの意見は『アウトサイダーズ』を巡る代表的な議論であるが、表現がリアルか否かという議論に終始しており、物語の特殊な構造について考察していない。しかし、物語の構造を考えると、主人公の少年が YA 小説ならではの特別な位置にいることが見えてくる。

ミシェル・ティが言及しているように、物語の最後にポニーボーイは自分の経験を語ろうと決心するが、その場面はこのように書かれている。

頭のなかに、都会のどん底で生きている何百、何千の少年たちの姿が浮かんできた。(中略)手遅れになる前に、だれかが行ってやらなきゃ。だれかこっち側のやつが、自分たちのことを話すんだ。そうすれば、まわりの人間たちも少しはわかってくれて、髪をグリースで固めてるだけで判断しようとは思わなくなるかもしれない。(282; 唐沢訳)

ポニーボーイの言う「こっち側」とは、自分と同じような貧しい境遇、社会のアウトサイドを指している。仲間だけを頼りにしていた少年が、「まわりの人間たち」つまり無理解な大人社会に対して声をあげようとしているのである。彼は、まず学校に提出する作文を書き始める。「映画館の暗がりから明るい陽の光のなかへ踏みだしたとき」(283)と始まるこの一文は、小説『アウトサイダーズ』の冒頭と同じである。ここで、読者が読んできたこの物語は、実は彼がこの物語を経験したゆえに書き始める手記なのだということが明かされるのだ。この書き出しが、映画館から外へ踏みだした場面なのは象徴的である。彼は社会へ歩み出す手続きとして自分の経験を語り始め、映画館という閉鎖された空間から「明るい陽の光のなか」へと一步踏み出す。こうして彼はこれから語り始める物語の主体となるが、しかし同時に、「暗がり」から一步踏みだすと、再びアウトサイドの物語へ入っていく。メビウスの輪のように循環する構造のため、主人公がどちらのサイドにいるのかわからないのだ。

この構造は、物語のなかでも主人公を不思議な位置においている。アウト

サイドにいる彼の仲間たちは、社会に聞き取られるような「声」をもっていない。親友のジョニーは、両親に暴力を振るわれ帰る家はない。彼は行き違いから刺殺事件を起こし、その逃亡中に「おれなんかよりずっと大切」(280)な子供たちを助け、その時の怪我が元で死んでしまうのだ。前科者のダラスは、ジョニーの死に動揺し自暴自棄になって事件を起こし、警察に射殺される。このような、社会に聞き取られる声を持たないアウトサイドの仲間たちのなかであって、学校の作文を書くという行為は、自分たちのことを記事にする新聞社や、仲間たちを退学させた学校と同じく「まわりの人間たち」の行為でもある。彼はアウトサイドにいる経験を語ることを決意するが、その行為は彼をインサイドにおくかもしれないのだ。メビウスの環のような物語のなかで、主人公は経済的社会的に困難な生活を強いられた不安定な少年であるのみならず、語り手としても「こっち側」と大人社会との境界にいる不安定な位置におり、その不安定な位置を引き受けた語り手となるのだ。

このような中間地帯に吊るされた位置にいるティーンエイジャーの姿が描かれているところが、この小説の YA 小説らしい特徴であり、児童小説のような古めかしい表現にも関わらず、出版から 40 年近く経った現在でも YA 小説の代表作と言われる由縁なのではないだろうか。主人公の主体位置や自己実現を考察の視座におくと、『アウトサイダー』以降に続く YA 小説にも、主人公の揺らぎや自己実現を疑問視する小説が続いているのがわかる。例えば、『アウトサイダーズ』に次ぐ YA 小説のヒットとなった Paul Zindel の *The Pigman* (1968, 以下『高校二年の四月に』)は、高校生のジョンとロレインが、交互に語り手となって、ピッグマンと呼ばれる老人との交流を記すという設定の小説である。この二人はいたずら電話がもとでピッグマンと知り合い、好意を抱き交際しつつも、一方で金を騙し取り、彼の入院中には彼の家に友達を連れ込んでパーティを開き、ピッグマンの宝物を壊してしまう。それを知ったピッグマンはショックを受け、体調を崩したまま死んでしまう。

この小説は、ピッグマンとの交流と彼への裏切りを記す二人の手記という設定であるが、この手記が問題の核心、つまり彼らの裏切りの解決につながることはない。なぜなら、そもそも手記を書く決意をしたのは、ピッグマンが死んだからであり、ピッグマンに詫びることが永遠に不可能になったときなのである。ロレインは、ジョンは「事実をねじまげてしまう」(12; 平井訳)と言い、ジョンはロレインも同じくらい嘘つきだと評している。互いに「嘘

つき」という二人が語る話は、授業中のいたずら、クイズ、親や図書館員の悪口など、とり止めなくわき道にそれ、ピッグマンの死の克服にはたどり着かない。もともと彼女たちの目的は達成できない条件におかれており、その不可能な条件をめぐってぐるぐると交渉することがせいぜいなのだ。やがてジョンは、自分たちは「いるべきではない所に足を踏み入れ」ていたのだと考える(194)。そして、そう気付いたところで、「身をかきす場所」も「行くべき所もない」(194)と語る。とりとめなく迂回する語りのなかで、ついにジョンは自分をどこに位置づけていいのかわからないと告白するのである。二人は、物語の終わりにそのことを認識することで、せめてその「行くべき所」もわからない不確かな位置を引き受けているのだ。

YA 小説のもう一つの金字塔である Robert Cormier の *The Chocolate War* (1974, 以下『チョコレート戦争』)は、社会における個人の重要性や主体性を否定するほど強烈な物語である。高校 1 年の主人公ジェリーは「宇宙をかき乱せるか」と書かれたポスターをロッカーに貼っている。彼は宇宙をかき乱す強い意志を持っているわけでも、正義を行おうという意志を持っているわけでもないが、しかし個人が無力ではないだろうと考えているのだ。その彼が高校の教師と生徒による不正に巻き込まれ、痛めつけられ、物語の最後には「宇宙をかき乱しちゃいけない」(303)と結論づける。個人は、既存の社会システムを変えるようなエージェンシーになりえず、制度に甘んずることでは生き残ることができないという虚無的な結論に達するのである。

主人公の主体位置という点から読むと、これらの小説では、物語の構造上、あるいはその結末で、主人公が目的を達成し自己実現することはない。ここにあるのは、自己実現という到着点がなく、自己の位置が定まらない状態で、自分を取りまく条件と交渉するティーンエイジャーの物語なのだ。子供と大人の間、語りうる者と語り得ない者との境に立ち、居場所を間違えたことに気づいても「行くべき所」はわからない。主体としての可能性と挫折の間、中間地帯に吊るされた、不安定な位置を引き受け、自分の置かれた環境と交渉しているティーンエイジャーが描かれているのだ。

3.

以上のような主体位置の不確かさは、YA 小説以前のティーン小説には見られなかった。ティーン小説では自己実現が物語の前提となっており、その結

末へ向けて一直線に物語が進むので、主体位置に揺らぎはなかったのだ。ティーン小説がすたれたのは、小説が前提とする自己実現が時代に合わなくなったためだと考えられるが、YA 小説に受け継がれなかった「自己実現」とはどのようなものだったのだろうか。

YA 小説以前には、ティーンエイジャーを明確なターゲットにしたジャンルはなく、ティーン向けとされた小説は数が限られている。American Library Association の冊子では、職業小説や恋愛小説、スポーツ小説などをティーン小説として挙げている(28-29)が、これらの小説を見ると、主人公が、様々な経験を通じて、人として、あるいは女/男として適切な行動ができる大人に成長する自己実現の物語であることがわかる。

職業小説は、1940年代から50年代にかけて流行したジャンルで、ある職業につく若い女性が一人前に成長していく過程を追う物語である。シリーズ化されたものも多く、数々の逸話的な事件を経て、主人公がいかに成功するか焦点をあてている。たとえば、職業小説の流行を作り出した Helen Boylston の *Sue Barton: Student Nurse* (1936) は、高校を卒業したばかりの主人公スー・バートンが看護学校に入るところから始まり、患者とのやり取りや看護師仲間の友情などが逸話的に語られ、6作続くシリーズの最後には、同じ病院で働く医師と結婚し退職して終わる。物語は彼女がどのように目標を達成するのかに焦点を当てており、彼女たちが大人の女性に成長するのは、目的達成の当然の結果とみなされているのである。

1942年に出版された Maureen Daly の *Seventeenth Summer* は、多くの類似小説を生み、ティーンエイジャーの初恋を描く恋愛小説を一つのジャンルにしたほどの話題作であった。この小説の主人公であり語り手であるアンジーは、ジャックとデートしはじめる嬉しさをこのように書いている。

男の子が持っている力って不思議。今までは誰でもなかったのに、デートをした途端に「誰かの彼女」になってしまうんですもの。(中略)男の子とデートすると新しいアイデンティティをもらえるみたい、その相手がジャック・ドゥルースならなおさらね。(60; 筆者訳)

アンジーはここで、「女は男との関係でのみ位置づけられる」ということに、フェミニスト的な視点から皮肉を言っているのではない。そうではなく、男の子とデートすることで新しいアイデンティティができ、自分の位置が明確

になることを喜びとして表現しているのである。初恋を大人になる徴候と捉えたこの物語においては、このような女の子の位置づけが歓迎されるものとなっているのだ。

職業小説や恋愛小説における女の子の成長が、一人前の看護婦やスチュワーデスになること、あるいは誰かのガールフレンドになったり、結婚することなど特定の役割のうちに描かれているのに対し、男の子の成長は漠然としている。1960年の American Library Association の冊子によると、男子に人気があったのは、John Tunis のスポーツ物語や Henry Felsen の *Hot Rod* (1950) などが挙げられるが、テュニス の *The Kid from Tomkinsville* (1940) は、主人公の青年が野球を通じて様々な困難を乗り越え、人間的な成長をとげて終わる。*Hot Rod* では、主人公が何者かとして成功するのではなく、自動車をめぐる冒険を通じて、自分の行動に責任を持つことが成長として描かれている。女の子が特定の役割によって成長するのとは違い、男の子は問題に対処する能力や責任感が成長を指しているのである。

マイケル・カートは、当時のティーン向け小説をまとめて、「郊外に住む、白いフェンスで囲まれた『サタディ・イブニング・ポスト』的な白人中産階級の世界を描いており、そこで起こりうる最悪の事態はプロムの相手との仲違いくらい」(20)だと指摘する。これらの小説が白人中産階級の世界を舞台に単純なプロットを繰り返しているだけだとの的確に指摘しているのだが、カートに加えて指摘するべきは、そこで繰り返されるプロットとは、主人公が困難(その困難が、カートのいう「仲違い」程度であっても)に直面し、それを乗り越えて成長する「自己実現」の過程だということである。男の子は *Hot Rod* のように冒険をして一人前の人間になり、女の子は *Seventeenth Summer* のアンジーのように男の子のガールフレンドになること、あるいはスー・バートンのように女性らしい仕事につき結婚することが、「成長すること」と結び付けられる。こうした自己実現の達成される場所が、「白いフェンスで囲まれた中産階級」の内部なのである。このフェンスの内側では「自己実現」とは白人中産階級の価値観を体現することであり、また、中産階級のジェンダー規範に沿うことが「成長」を意味しているのである。

4.

上記の考察から、YA 小説に設定されていないのは、当然の帰結として達成

される中産階級的な「自己実現」だと言うことができる。そうであれば、この言説の変化をもたらした社会的背景はどのようなものだろうか。ここでは、ティーンエイジャーを位置づける社会的背景を次の二点に焦点を当てて考察したい。1960年代頃にティーンエイジャーが市場として顕在化したこと、そしてその市場では、不確かな主体位置にあって自分を取り巻く環境や条件と交渉するティーンのイメージが流通していることである。ティーンエイジャーがこのように捉えられる社会的背景とはどのようなものなのか。

「自己実現」のティーン小説が流通しはじめる1930年代には、高校卒業者の割合は30%、つまり義務教育を卒業したあとに仕事につかない「子供でもなく就業者でもない立場」にあり、「贅沢な思春期」(Carter xvii)をもつ人は、中産階級の30%でしかなかった(National Center for Education Statistics)。さらに、1954年に公立学校での人種隔離が禁止されるまでは、学校や公共施設での人種隔離は当たり前であり、「白いフェンス」がどこまで張り巡らされていても、フェンスの内側では問題とはみなされなかった時代だったといえる。

YA小説が登場する1960年代には、この人口に変化が見られる。高卒者の割合は1955年には63%、70年には77%へと増加している(National Center for Education Statistics)。30年代には一握りしかいなかった「子供でもなく就業者でもない」立場のティーンエイジャーが、「白いフェンス」を越えて広がったのである。このことは、高度産業化の進展と賃労働の拡大を示しているともいえる。というのも、家族単位の家内経済では子供はそのまま労働力として大人になっていくが、賃労働という労働システムへ移行することによって、家族は労働と分離され、教育の社会化が進んでいくからである(D'Emilo 148-155)。こうした社会になったからこそ、ティーンエイジャーが子供でも大人でもない過渡期にあると認識され、「思春期の贅沢さ」を手にし始めたのであり、この時期にその人口が広がったのである。

さらに、ティーンエイジャーは出版界においても消費者層として認識され始めた。この時期にはペーパーバックの出版が盛んになり、小説が量産・量販されるようになったので、興味深い表紙絵に包まれた安価な本がドラッグ・ストアやスーパーでも売られるようになり、多くの人の目に触れることになったのだ(Speer 153)。小説が手軽な商品となり、広く消費されていくこの消費文化のなかで、ティーンエイジャーという年代層だけに焦点をあてた「YA小説」という市場が成立したのである。

しかし、「思春期の贅沢さ」を手に入れたティーンエイジャーを対象としているのに、YA 小説は「贅沢さ」とは程遠いイメージでティーンエイジャーを捉えている。『アウトサイダーズ』の少年たちは、経済的に困難な家庭に育っているだけでなく、自分の声が聞き取られるか否かの不安定な境界に立っているし、『高校二年の四月に』の二人は、決して達成されることのない目的をもつ不可能な位置づけにある。『チョコレート戦争』では、主人公のジェリーが個人の可能性を否定し、「宇宙をかき乱せるか」というポスターは「嘘っぱちだ」という結論にたどり着く。

やれといわれたら、なんだってするんだ。(中略)みんなは、自分の好きなようにしろ、というのが、ほんとうは、そうは思っていないんだ。好きなようにするのを、みんなは許さない。それが、偶然、あっちも好きなことでなければ。(303; 坂崎訳)

生き残るためには、「あっち」の好きなことをしないとならない、「でない、やつらは、おまえを殺す。」(304)とジェリーは続ける。主体として生き残るためには、制度に従属することだという主人公は、「思春期の贅沢さ」というイメージとあまりに食い違っているようだ。

50・60年代は、前述のように高等教育が進展した時代であるが、これは白人中産階級以外の位置にいる人々に対しても、賃労働の普及により教育と職業の「選択」が広がっていった時代でもある。John D'Emilo は、資本主義のもと、個人は仕事を探す自由と労働力を売る自由をもつとして、以下のように述べる。

もし私たちが自らの労働力を売る自由を有していると積極的な意味で言うのなら、否定的な意味でいうと、自分の労働力を売る以外には選択の余地がないということになる。この弁証法 搾取と幾らかの自律性との間の恒常的な運動 は、資本主義下に生きているあらゆる人間の歴史を特徴づけるものである。(147; 風間訳)

デミリオによると、資本主義のもとで主体になるということは、「資本主義の作り出す選択のなかから選ぶ主体であれ」という要請に応えることでしかありえない。この見解に加えて、個人は労働力を売る「自由」に追い込まれていると同時に、その労働力には値段がつくこと、つまり高い労働力とそうでない労働力があるということを目指したい。この差異化の条件は、産業化以

前から続く家父長制や人種政策に依拠し、従ってそこでの問題を内包している (Davis 161-192, hooks 96-107, Young 43-70)。賃労働の普及した社会では、ジェンダーや人種に依拠する条件のもと、個人 (の労働力の価値) の新たな差異化とその条件をめぐる交渉や競争を生み出しているのだ。

この時期に出現したティーンエイジャーは、子供と大人の間接地帯に在るだけでなく、家族や学校、そしてジェンダーや人種などの言説といった社会的装置 / 制度との関係のなかで、これから大人 / 就業者になる過程にあると位置づけられる。YA 小説に描かれる対象として、また YA 小説が対象とする市場としてティーンエイジャーが顕在化する社会においては、彼 / 女たちは常に既に「自己実現」が困難な状況におかれ、資本主義下の社会的条件との交渉のなかにあるのだ。

5.

このような立場に置かれたティーンエイジャーにとって、YA 小説以前のティーン小説が時代錯誤に映るのは当然に思える。また市場という面からみれば、もはや「白いフェンス」に限る必要がないだけでなく、フェンスを越えて共感を集めるものとならなくてはならない。ヒントンは、『アウトサイダーズ』が出版された同じ年に、*New York Times* にエッセイを載せ、ティーン向けの小説は 15 年遅れていると指摘して以下のように言う。

(これまでの) ティーン向けの本は、わたしたちをのん気なグループとして描いていますが、一方でわたしたちが耳にするのは、「未来はキミたちの手に！」というセリフばかりです。わたしたちの両親は子供時代に、未来が誰の手にあるのかなどと悩む必要はありませんでした。時が来れば、負うべき責任を負っていたのです。それなのに現在は、13 歳になってからずっと未来について心配しなければなりません。(Hinton *New York Times* 28; 筆者訳)

ここには、産業化社会の要請により顕在化したティーンエイジャーの位置づけ、未来を手にしたわけではない不安定な立場としての位置づけを読むことができる。ティーンエイジャーという年代が社会的文化的に顕在化されたときは、彼女たちが未来の定まらぬ、不安定な、悩める立場に放り込まれたときでもあるのだ。もはや全てを解決する万能薬である「自己実現」はなく、

成長は学校や家族など社会との関係性のなかにしかない。

「自己実現」は、物語を構成する大きなテーマにはなりえなくなった。その代わりに、登場人物たちは不確かな主体位置を引き受け、自分を取り巻く条件と交渉をする主体となったのだ。そこではまた、社会のなかで様々に揺れ動き、不確かな位置にいる個人の悩みや見解が打ち明けられ、共有される。冒頭で紹介したミシェル・ティは、『アウトサイダーズ』により世界が広がったと述べているが、不確かな主体位置の物語は、不確かな位置にいる現実のティーンエイジャーたちへ呼びかける媒体でもある。YA 小説は産業化社会の消費文化のなかで流通しているジャンルであるが、同時にまた、それゆえに顕在化する価値観や社会問題が議論され、個人の存在可能性が想像される場でもあるのだ。

主要参考文献

- American Library Association. *Young Adult Services in the Public Library*. Chicago: American Library Association, 1960.
- Boylston, Helen Dore. *Sue Barton, Student Nurse*. Boston: Little, Brown, 1936.
- Cart, Michael. *From Romance To Realism: 50 Years Of Growth And Change In Young Adult Literature*. New York: HarperCollins Publishers, 1996.
- Carter, Betty. "Foreword." *The Fair Garden and the Swarm of Beasts: The Library and the Young Adult*. by Margaret A. Edwards. Chicago: American Library Association, 2002. ix-xxxii.
- Cormier, Robert. *The Chocolate War*. 1974. New York: Laurel Leaf, 1986. (口バート・コーミア 『チョコレート戦争』坂崎麻子訳、集英社、1987年)
- Daly, Maureen. *Seventeenth Summer*. New York: Simon Pulse, 2002.
- Davis, Angela Y. *The Angela Y. Davis Reader*. Ed. James, Joy. Cambridge MA: Blackwell Publishing, 1998.
- D'Emilo, John. "Capitalism and Gay Identity." *Powers of Desire: The Politics of Sexuality*. Eds. Snitow, Ann, Christine Stansell, and Sharon Thompson. New York: Monthly Review Press, 1983. 100-113. (ジョン・デミリオ「資本主義とゲイ・アイデンティティ」風間孝訳『現代思想』25-6 1997. 145-158)
- Donelson, Kenneth L. and Alleen Pace Nilsen. *Literature for Today's Young Adults*. 5th ed. New York: Longman, 1997.
- Felsen, Henry Gregor. *Hot Rod*. New York: Dutton, 1950.
- Hinton, S. E. *The Outsiders*. New York: Viking Juvenile, 1967. (S. E. ヒントン 『アウトサイダーズ』唐沢則幸訳、あすなる書房、2000年)
- . "Teen-agers Are For Real." *New York Times* 27 Aug. 1967. 26-29.

- hooks, bell. *Feminist theory: from margin to center*. 2nd ed. Cambridge, MA: South End Press, 2000.
- National Center for Education Statistics. "Table 102. High school graduates compared with population 17 years of age, by sex of graduates and control of school: Selected years, 1869-70 to 2002-03." *Digest of Education Statistics, 2003*. 30 Sep. 2005 <<http://nces.ed.gov/programs/digest/d03/tables/dt102.asp>>.
- Speer, Lisa K. "Paperback Pornography: Mass Market Novels and Censorship in Post-War America." *Journal of American & Comparative Cultures* Fall-Winter 2001: 153-160.
- Tea, Michelle. "Introduction." *Without A Net: The Female Experience of Growing Up Working Class*. Emeryville, CA: Seal Press, 2003. xi-xv.
- Trites, Roberta Seelinger. *Disturbing the Universe: Power and Repression in Adolescent Literature*. Illinois: University of Iowa Press, 2000.
- Young, Iris Marion. "Beyond the Unhappy Marriage: A Critique of the Dual Systems Theory." *Women and Revolution*. Ed. Sargent, Lydia. Boston, MA: South End Press, 1981. 43-70.
- Zindel, Paul. *The Pigman*. New York: Harper & Row, 1968. (ポール・ジンデル 『高校二年の四月に』 平井イサク訳、講談社、1974年)

